

# 特別賞 紀伊國屋書店賞

『何者』 朝井リョウ著

商学部4年 石塚晃一

明るく振舞うネット上の自分と、本音を言えない現実の自分。ラインやフェイスブック、ツイッターなどのSNSが普及したネットワーク社会の中で、自己の二面性のギャップに苦しむ私たちは、一体「何者」なのか。個人の存在の本質を問いかける一冊だ。

本作品は、ネットを情報ツールとして用いる現代の大学生が就職活動に取り組む様子を、主人公・拓人の目線から見た物語である。それぞれ異なる立場にある登場人物たちは、明確な意義を見出せないまま進んでいく就職活動に不安や迷いを感じながら、ツイッターを利用して自分の考えや努力の跡を対外的にアピールする。本音と建前、理想と現実の間で葛藤する若者の姿は、読者の共感を誘い、物語の中へと引き込んでいく。ツイートされた本音が、一見して良好な人間関係を次第に大きく変えていく様子は、現実世界さながらの臨場感で楽しめるはずだ。

著者の朝井リョウが本作品で描きたかったもの。それは、自分の行動を他者の判断基準に委ねて依存する、私たちの精神的な脆さではないか。「自分らしくありたい」と願いながらも他者からの評価に怯え、誰かと絶えず繋がることで安心し、努力する者を否定することで優越感に浸る。拓人の目に映る人々の姿は、現代社会のリアルな光景を浮かび上がらせている。また、私たちは「観察対象」である一方、拓人と同様に、他者の行動を自分の基準で判断する「観察者」でもあるという点を著者は逃さずに捉えている。だからこそ、物語の終盤で拓人に突き付けられる真実は読者の胸にも深く突き刺さり、ラストシーンに微かな希望の光を感じることが出来るのだろう。

人間は、誰かと繋がっているように見えても、孤独な存在だ。特に大学生は、自分ひとりだけで将来について考える立場にあり、悩み苦しむことも多い。「自分らしく」生きるためには、自分と向き合って「何者」なのかを問い続け、主体的に行動しなくてはいけない。このタイトルには、人間関係の中で見失いがちな個人の存在の本質を思い出してほしいという著者からのメッセージが込められている。

この一冊は、就職活動を控える大学生は勿論、社会人も是非、手に取って読んでほしい。道標のないネットワーク社会の中で迷っている一人ひとりの足元で、灯火のように、進むべき道を照らしてくれるに違いない。